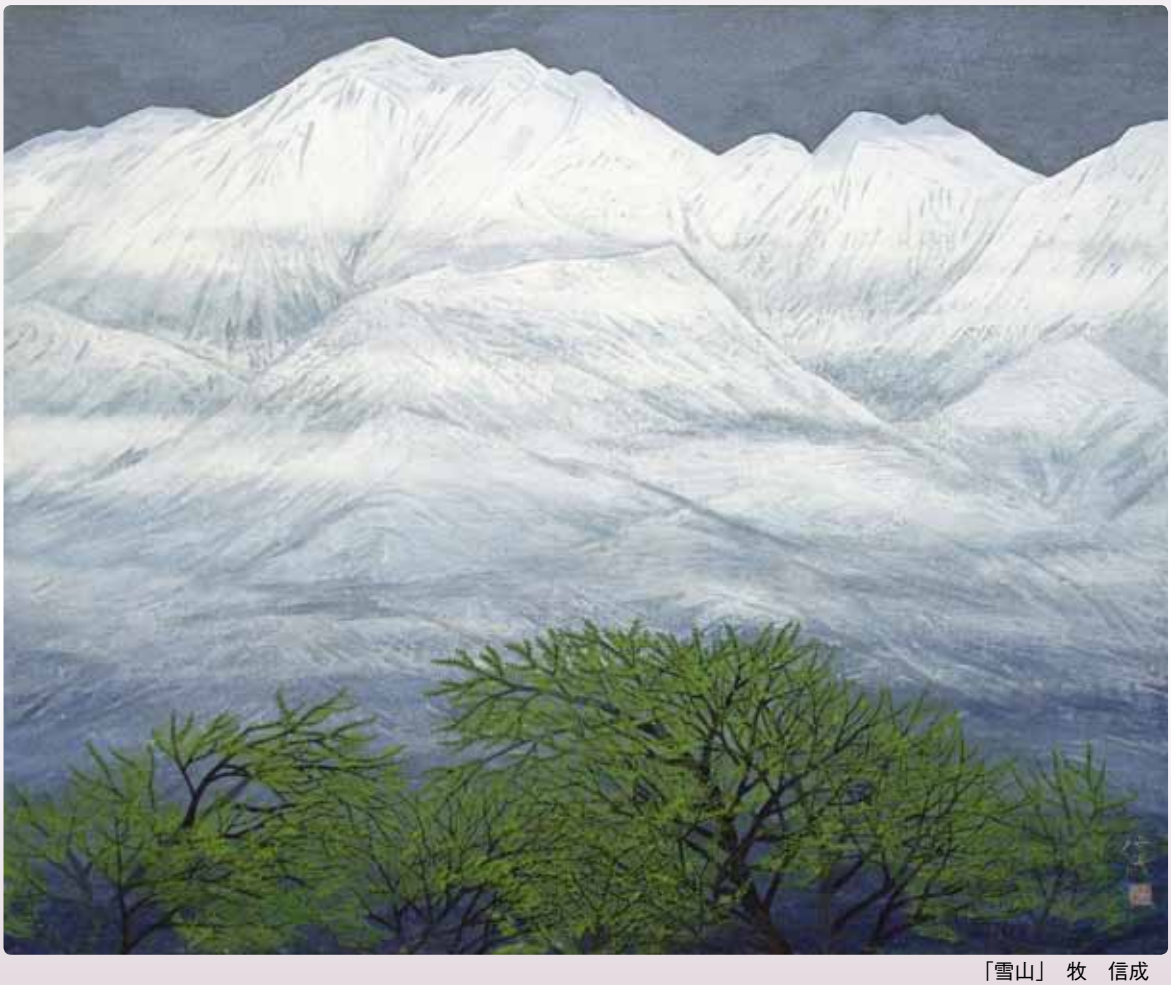
上州文化

contents

巻頭言／板橋春夫 ②
特集 ぐんまミュージアム散歩／桑原高良 ③
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
群馬県教育文化事業団 INFORMATION ⑩
地域文化をつなぐ／林　信保 ⑪
ART NOW 「創造力の恵み、音楽の癒し」／松田夕香 ⑫
カフェの隅から　思い出を背に／竹田朋子 ⑭



「雪山」 牧　信成

巻頭言　あなたは〈を〉を何というか？

ぐんま伝統文化継承委員・博士（文学）　板橋春夫

七月のある日、高崎にある群馬パース大学で授業が終わったとき、いつも熱心に聴いている女子学生が「先生、この子は〈を〉のことを変な言い方するんです」と語りかけてきた。そして彼女は傍らにいた友人に「ほら言ってみて」と促す。新潟出身の学生は言葉を発した。

「くっつきのを」

私は思わず「えっ！」と驚いた。くだんの女子学生は面白いテーマを教えてやったと自慢顔であった。教室に学生たちが残っていたので質問してみた。確か吾妻郡の学生が「くっつきのを」と答えた。その後、長い夏休みに挟まれ、この話題をすっかり忘れていた。

ブルベリーが紅葉したころ、筑波大学の学生が川場村に民俗学実習にやって来た。私はお手伝いとして参加し、夜のミーティング後に一杯飲みながら学生と歓談していた。ふと思い出し、「〈を〉を何というか？」と質問してみた。すると目の前の学生は言った。

「重たいを」

周りにいた学生は「うっそー、何それ？わおんのをだよ」、もう一人が「ワ行のをだよ」と言った。居合わせた学生は皆どちらかを使っていた。彼は栃木県出身。私も「重たいを」以外は知らない。その後、複数の大学で同じ質問を試みた。その結果、次のことがわかった。「わおんのを」「ワ行のを」のワ行系が圧倒的に多い。その次が「WO」「うぉ」系。「くっつきのを」と「つなぎのを」のつなぎ系が第三位。そして「重たいを」が続く。あとはドングリの背比べで、「小さいを」「かぎのを」「～は～を～するのを」「終わりのを」「下のを」「難しいを」「助詞のを」など。細かな違いを含めると二〇通りくらいになった。

「重たいを」は、群馬県や栃木県に多く、地域限定の言いまわしのようである。しかし、世代によっても異なる。「ちいさいを」は富山県。また、「終わりのを」と書いた学生に、終わりは「ん」だよと言って笑わせた記憶がある。実は「大阪のお」と「尾張のを」という区別法が存在し、笑っている場合ではなかったのだ。

人びとに共有する知識がある場合は、何の感動も生まれない。しかし、ある文化と違う文化が接触すると、緊張が発生する。自己の経験以外の知識に対し、その衝撃が大きいほど攻撃や批判の対象となっていく。なぜこのようにたくさんのバリエーションが生まれたのか疑問が湧くし、周圏的分布が描かれるかもしれない。世代差もあるらしいが、教育の問題とも関わるだろう。とにかく、これは日本文化研究の大問題（？）である。

ぐんま ミュージアム散歩

歴史をしのぶ古碑とともに 文字や考古の研究者も来館

④「多胡碑記念館」

桑原高良

上毛かるたに「昔を語る　多胡の古碑」とうたわれた国指定特別史跡「多胡碑」。その名を冠した施設が高崎市吉井町にある。「多胡碑記念館」だ。旧多野郡吉井町の多胡碑隣接地に 1996（平成 8）年に開館。以来 17 年、企画展などを通して地域の歴史や書、文字研究の拠点となってきた。古碑とともにある同館を紹介する。

多胡碑記念館（都丸芳明館長）を語るとき、忘れてならないのが、多胡碑（昭和二十九年、国特別史跡指定）の存在。この碑は、今からおよそ千三百年前の和銅四（七一一）年、朝廷からの命で、上野国に多胡郡が建郡されたことを示す建郡碑。その内容は『続日本記』の記述とも符合することから、同碑が日本古代史を探る重要な資料に位置付けられている。地元の石材（通称・多胡石）を使い、笠石を頂いた碑には、六行にわたって建郡のいわれなどが刻まれている。その書体は見事で、江戸時代から広く注目され多くの書家や文人も訪れているという。

現在では、覆屋の中にあり、毎年春三月に一般公開されている。また、高崎市では、十年計画で郡の役所「郡衙（ぐんが）」などにつながる周辺発掘調査も開始した。

多胡碑の覆屋

◇多胡碑を中心として

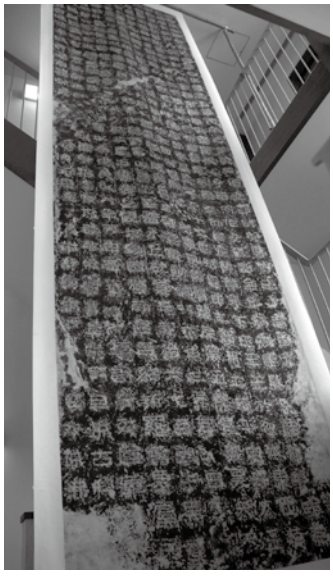
多胡碑記念館は、鏑川の段丘上に位置し、碑をイメージしたような二つの立体が並び立つ造り。その設立の目的に、「多胡碑をはじめとする郷土の歴史、文化等について市民の理解を深め、もって生涯学習、学術及び文化の振興に寄与する」とあるように、多胡碑との関係なくして同館は語れない。

館内を見てみよう。入館してすぐ目につくのは、多胡碑の複製、さらに二階までの吹き抜け部分には好太王（広開土王）碑の大きな拓本が吊るされている。

二階には、興味あるいくつかの展示室がある。多胡碑の実物大複製が置かれている多胡碑の部屋、日本三古碑（多胡碑、多賀城碑、那須国造碑）や仏足石碑などを紹介する古碑の部屋、大小の拓本が展示されている拓本の部屋、李朝時代の書斎を再現したゾーンもある。韓国の上流階級の夏のたたずまいをイメージした露台も趣があり、戸を開けると外に、多胡碑の杜が見える仕組みだ。露台の内側には、一木一石を配した中庭も配置されている。

多胡碑の碑文をはじめ、文字を中心にした展示構成だけに、書家や書をたしなむ人の来館も多いという。時代を担う子供たちの書道展も毎年開かれている。地味だが、味のあるミュージアムだ。

多賀城碑などの複製



好太王碑の拓本

◇企画展「文字の遺産」

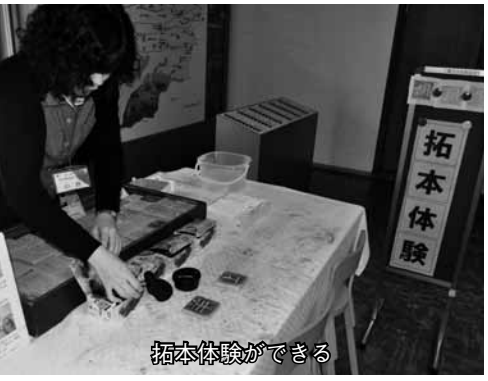
同館では十一月六日から二〇一三年一月二十日まで、企画展「多胡碑　文字の遺産」を開催中だ。企画展は今回で三十六回目。同館関係者は、企画の狙いについて「推定される古代の多胡郡地域から出土した刻書・墨書土器、刻書紡錘車、文字瓦などの考古資料に記された文字を通して、改めて文字資料としての多胡碑（上野三碑）を捉える試み」と説明する。

企画の主な構成は、楔形文字や象形文字に代表される世界文明の文字の紹介、漢字の誕生、古代多胡郡の文字資料などだ。ここには、上野三碑（多胡碑、山上碑、金井沢碑）の拓本はもちろん、地元の遺跡から出土した文字が刻まれた紡錘車、墨書土器、文字瓦なども数多く展示され、文字から人々の暮らしも想像される。面白いものでは、「多多多」と多の文字が数多く刻まれた紡錘車などがある。企画展と常設展示と合わせて見学するとさらに文字への理解が深まる。

企画展には上野三碑の拓本も

◇拓本体験も人気

同館一階では、来場者が希望すれば、簡単な拓本



拓本体験ができる

ミュージアムショップにも拓本

づくりに挑戦できる。多胡碑の文字を参考に作られたミニ拓本原版に紙を張り付け、その上から墨をうつことで文字拓本ができる。子供たちや保護者に人気だという。この取り組みの背景には、楽しみながら文字への関心を持ってもらい、多胡碑という地域の貴重な文化遺産について知るきっかけにしてほしいという同館の思いがある。

◇見学記念に拓本

同館ミュージアムショップには、図録とともに多胡碑の拓本、拓本Tシャツなどが並ぶ。同館や多胡碑の見学記念として拓本を購入する人も多いという。中には、書の参考にしたいと求める書道関係者もいるという。

◇周囲の見どころ

多胡碑記念館や多胡碑周辺は「吉井いしぶみの里公園」として整備され、管理が行き届き、見どころも多い。多胡碑覆屋近くには、初代県令、揖取素彦（一八二九―一九一二）の歌碑が立つ。吉田松陰の義弟で、多胡碑の保存管理に尽力した人物。現在、没後百年を記念し県内でも多彩な催しが行われている。歌は「深草のうちに埋もれし石文の世にめづらるゝ時は来にけり」とある。解説板には、多胡碑の拓本を贈られた際の礼状に記された歌だと書かれている。

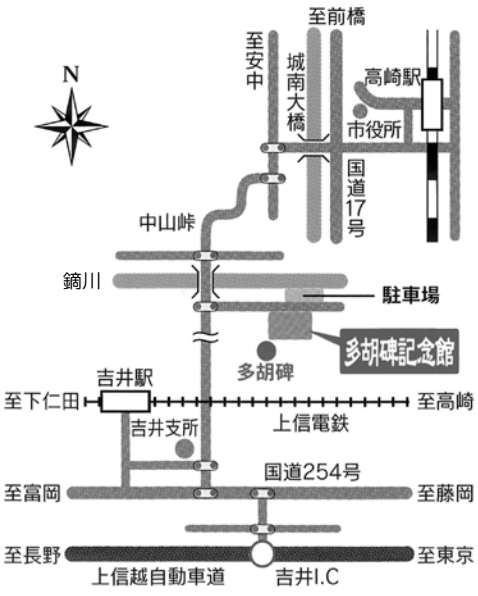
揖取素彦の歌碑

さらに近くには、書道関係者が注目する隷書体で書かれた「多胡碑記」の碑がある。書は日下部鳴鶴の筆とされる。

記念館東側には、古代蓮（大賀蓮）が植えられた池があり、季節になると美しい姿を見せる。この蓮を被写体にした写真展も毎年夏に同館で開かれている。

「多胡碑記念館」

高崎市吉井町池 1085
☎　027・387・4928
Fax 027・387・8726
開館時間：午前９時 30 分～午後５時
休　館　日：月曜（祝日の場合は翌日）年末年始
入場料金：大人 200 円、大学生 100 円
　　小・中・高校生と 65 歳以上無料



学芸員に聞く

「多胡碑の情報拠点に」

多胡碑記念館の企画を主に担当する学芸員の方たちに館の役割などについて聞いた。

―開館から十六年、記念館が果たしてきた役割についてお聞きしたい。

多胡碑近くにあることから、日常的に史跡地の維持管理に注意できること、見学者への対応が行えることなど、多胡碑の保存と活用面でも果たしている役割は大きいと思います。また当館は、主に考古資料を展示するスペース、中国の石刻の拓本を展示しているスペース…など多彩な展示室があるのも特徴です。企画展示についても考古展、拓本展、書道展などジャンルが異なるものを開催してきました。これらを通して日本の古代史や書道史、文章史、民俗など、多角的に検討され蓄積されてきた多胡碑の研究史や評価について、一側面に偏ることなく、広く一般の方々に知ってもらうための一助になってきた、と考えています。

館内では多胡碑について解説

―地域や次代を担う青少年に対しても多彩な企画を行っているようですが。

「上毛かるた」で多胡碑の名を知っている子どもたちは多いが、さらに興味を持ってもらえるように、地域の子どもたちを対象とした公募書道展や、多胡碑や古代の多胡郡の特徴について分かりやすく伝えるための展示会を毎年開催しています。また常設の体験コーナーとして拓本体験なども行っています。

―さまざまな取り組みに対する利用者の反応は。

多胡碑に直接関連する展示や催しを近くの施設で見学できることは、他の古代碑の所在地には見られない特徴なので、おおむね歓迎されています。また、展示内容もさまざまなので、繰り返し来館する利用者もいます。具体的には、「参考になった」「今後も、いろいろなイベントを開催してほしい」などの声が寄せられています。その一方、「内容が難しく、とっつきにくい」という意見のほか、要望として、「中世以降の多胡碑の歴史について取りあげてほしい」「羊太夫伝説の特別展を開催して」「多胡碑以外のテーマも扱ってほしい」などがあります。

―今後、記念館はどうあるべきでしょうか。

日常的な多胡碑の保存・活用はもちろん、多胡碑を軸とした企画展によって、多胡碑に関する情報を発信し、異なる研究分野の橋渡しを行っていきたいと思っています。多胡碑は近世以降に、文人・研究者によって、歴史・文学・書の世界で興味の対象となり、多くの文化的情報を発信した経緯があります。現代においても多胡碑や記念館が同様の位置づけとなるよう常に意識し、事業を行っていきたいと考えています。

◎館長のおすすめポイント

歴史や文化、自然に恵まれた吉井地域には多くの見所があります。地域のシンボルにもなっている牛伏山、伝統を今に継承する馬庭念流、名刹の仁叟寺、多くの歴史資料を展示する吉井郷土資料館など、おすすめポイントも多彩です。ぜひ、訪ねてみてください。

牛伏山を望む

桑原高良

（くわばら　たかよし）

群馬ペンクラブ会員、群馬県文学会議会員。

1950年生まれ。74年に上毛新聞社入社。藤岡支局長、前橋支局長、編集局文化生活部長、出版局次長、文化情報誌「上州風」編集長、編集局次長などを経て太田支社長。館林シャトルおよび高崎タカタイの編集長。2011年3月退職。現在、中央カレッジグループ学園新聞編集長。著書に『二足の草鞋と本音人生―聞き書き大川栄二』『わがこころ　語る上州人　塩原友子』『初代コロムビア・ローズ物語―人生は歌とともに』（いずれも上毛新聞社刊）。

上野東歌探訪

(11)

北川和秀（きたがわかずひで）　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

今回は、これまでとは趣向を変えて、山名丘陵（高崎市山名町）に所在する「石碑之路（いしぶみのみち）」の万葉歌碑を紹介する。「石碑之路」というのは、山名八幡宮の脇から山上碑を経て金井沢碑に至る道で、高崎自然歩道の一部をなし、道の傍らに万葉歌を刻んだ歌碑が二十数基も建てられている。途中から分岐して根小屋城跡に至る道沿いにも群馬県ゆかりの人々の歌碑や詩碑等が八基建てられている。山名八幡宮脇から山上碑までは舗装道路もあるが、それ以降は山道で、道が細くなっている箇所もある。高低差が最も大きいのは山上碑に至る石段であろうが、七曲りのあたりもそこそこ高低差はある。

石碑之路の入口の碑

これらの石碑を建てたのは会社社長の信澤克己氏である。氏は、私財を投じてこれらの石碑を建立していった。そのいきさつは、昭和六十一年、山名八幡宮裏に高崎市が建てた石碑に詳しい。その碑文を引用する。

石碑（いしぶみ）の路

信沢克己さん　土建会社の社長さんである　信沢さんは古代の人々が佐野山と呼んだ今の山名丘陵の麓、根小屋に住んでいた

信沢さんは雉を飼育して山に放す　狩猟には関係なくただ放す　そのため信沢さんは佐野山の尾根路、高崎自然歩道を歩く

その頃、一九七二年　丘陵は二ヶ所でブルトーザーが唸り、無残に山肌が削られていた

丘陵には山ノ上の碑や金井沢の碑があり、万葉集に納められた上野国歌の幾つかは、この附近で唄われた古代歌謡とされる　ここは私たちの心のふるさと、緑の丘陵である

信沢さんはこの心のふるさとを大切に保存するため、万葉歌碑を建てることにした　佐野山の路にである　山ノ上の碑も金井沢の碑も、千年以上そこにある　歌碑の造立は古代のロマンを伝え、石がそこにあるかぎり、人々はこの路を大切にするだろう　信沢さんは今も石碑の路を造る

一九八六年一月　　高崎市

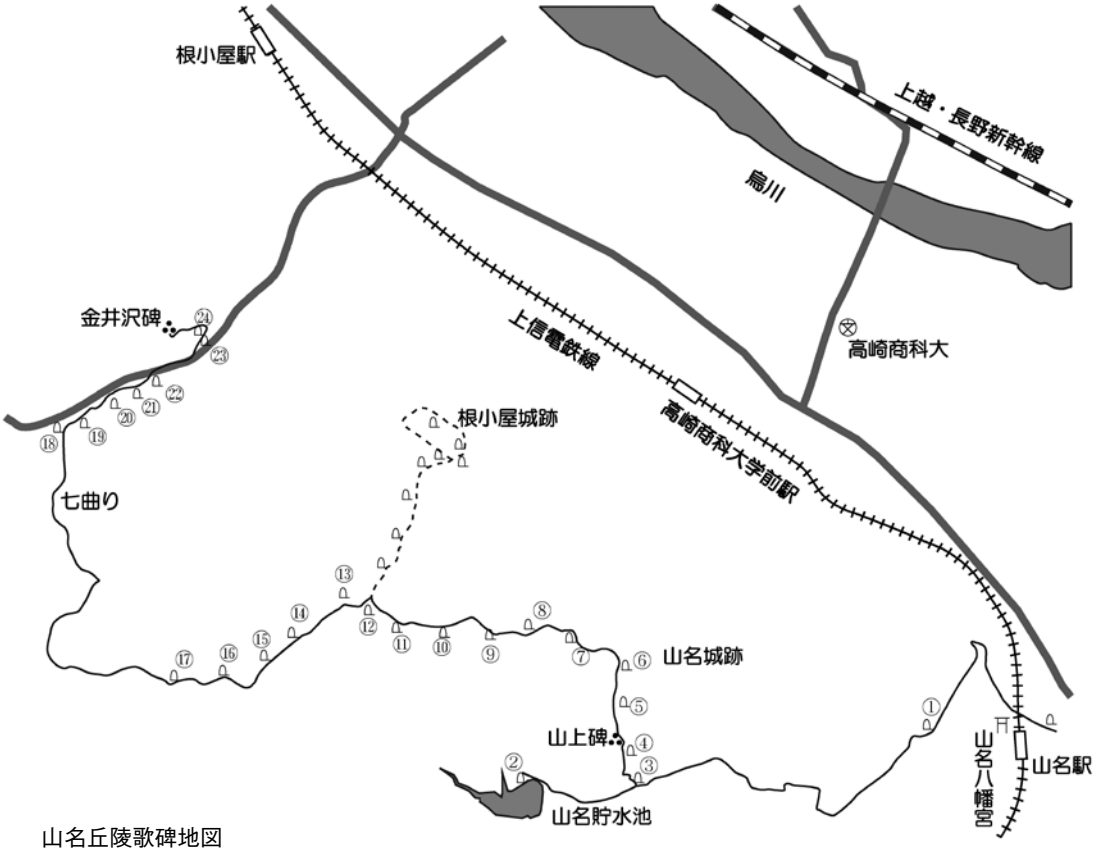
信澤氏が抱いた危機感や、氏が万葉歌碑を建てようとした理由は、この碑文からよく伝わってくる。なお、この碑文には、古代、山名丘陵を佐野山と呼んでいた旨の記述があるが、佐野は烏川の左岸の地名であろうと考えられるので、烏川右岸の山名丘陵を佐野山と呼んだかどうかについては検討を要する。碑文の趣旨には関わらないが、指摘だけしておく。

一、「石碑之路」の万葉歌碑

「石碑之路」の地図と、万葉歌碑の一覧表とを掲げる。一連番号は順路に従っ

「石碑之路」の万葉歌碑一覧

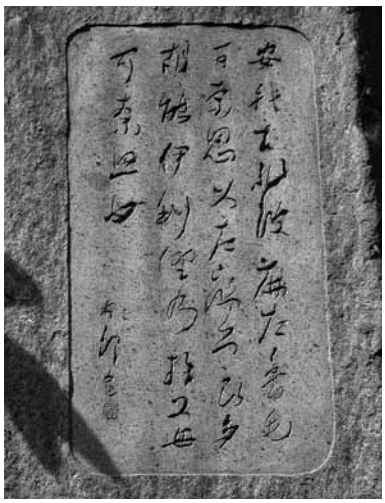
	歌	巻・番号	作　者	表　記	揮毫者	建碑年
1	佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる	14・3473	未勘国東歌	原文・訓読	高野辰之	昭和 11 年
2	古のふるき堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり	3・　378	山部赤人	訓読	高井紫風	昭和 57 年
3	吾が恋はまさかもかなし草枕多胡の入野のおくもかなしも	14・3403	上野国東歌	原文	手島右卿	昭和 56 年
4	日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ	14・3402	上野国東歌	漢字（原文ではない）	大沢雅休	昭和 51 年
5	明日香川塞くと知りせば数多夜も率寝て来ましを塞くと知りせば	14・3545	未勘国東歌	訓読	山本聿水	昭和 51 年
6	遠しとふ故奈の白嶺に逢ほ時も逢はのへ時も汝にこそ寄され	14・3478	未勘国東歌	訓読	安東聖空	昭和 52 年
7	小竹の葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別れ来ぬれば	2・　133	柿本人麻呂	訓読	大沢雅休	昭和 51 年
8	紫草の根延ふ横野の春野には君を懸けつつ鶯鳴くも	10・1825	作者不明	訓読	黒澤春来	昭和 51 年
9	妹をこそあひ見に来しか眉引の横山辺ろの鹿なす思へる	14・3531	未勘国東歌	原文	山本聿水	昭和 53 年
10	利根川の川瀬も知らずただ渡り波にあふのす逢へる君かも	14・3413	上野国東歌	訓読	北村九皐	昭和 51 年
11	わが家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも	20・4406	上野国防人歌	訓読	千代倉桜舟	昭和 51 年
12	伊香保ろの八尺の堰塞に立つ虹の顕ろまでもさ寝をさ寝てば	14・3414	上野国東歌	訓読	深井雙葉	昭和 51 年
13	伊香保嶺に雷な鳴りそねわが上には故は無けども児らによりてそ	14・3421	上野国東歌	訓読	小坂奇石	昭和 53 年
14	上毛野可保夜が沼の大薦草よそに見しよは今こそ勝れ	14・3416	上野国東歌	訓読	千代倉桜舟	昭和 53 年
15	上毛野佐野の茎立折りはやし吾は待たむ゛今年来ずとも	14・3406	上野国東歌	原文	武士桑風	昭和 53 年
16	夕闇は路たづたづし月待ちて行かせわが背子その間にも見む	4・　709	豊前国娘子大宅女	漢字（原文ではない）	大沢雅休	昭和 54 年
17	伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど吾が恋のみし時無かりけり	14・3422	上野国東歌	訓読	千代倉桜舟	昭和 53 年
18	一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり夫はも	14・3512	未勘国東歌	訓読	日比野五鳳	未詳
19	伊波保ろの岨の若松限りとや君が来まさぬうらもとなくも	14・3495	未勘国東歌	原文	櫛淵蓬山	未詳
20	難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも	20・4404	上野国防人歌	原文	小暮青風	未詳
21	伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら	14・3409	上野国東歌	訓読	加藤蕙秀	未詳
22	あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに	2・　107	大津皇子	漢字（原文ではない）	大沢雅休	未詳
23	吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを	2・　108	石川郎女	漢字（原文ではない）	大沢雅休	昭和 61 年
24	やすみしし　わご大君　神ながら　神さびせすと　……	1・　38	柿本人麻呂	訓読	大沢雅休	昭和 61 年



山名丘陵歌碑地図

て便宜的に付したものである。①の歌碑の揮毫者は高野辰之氏で、建碑も昭和十一年であるので、これは信澤氏が建てたものではない。②は山上碑への分岐点を通り過ぎて、山名貯水池への道を進んだ先にある。「山名貯水池」と刻んだ碑の裏面に山部赤人の歌が刻まれているらしいのだが、立ち入り禁止のため石碑に近づくことができず、裏面を確認することはできなかった。赤人の歌は、藤原不比等の邸宅の池をよんだもので、上野国とは関係がない。貯水池のほとりという立地の関係で池をよんだ歌を選んだのであろう。③の歌碑は山上碑・山上古墳への長い石段の下に位置する。④以降の歌碑は、すべて山上碑から金井沢碑への道沿いに建てられている。

信澤氏の意向通り、選ばれた歌は上野国東歌が多く、未勘国東歌（上野国の歌とする説のある歌を含む）も目立つが、中には柿本人麻呂の歌（二首）、豊前国娘子大宅女の歌、大津皇子の歌、石川郎女の歌など、東国とは無関係と思われる歌も含



③の歌碑の刻字部分

②の碑

筆塚

まれている。これらの歌碑には違和感を覚えるが、これらの歌碑の揮毫者は例外なく大沢雅休氏である。大沢氏は、明治二十三年に高崎市柴崎町で生まれた書家で、昭和二十八年に亡くなっている。すなわち、信澤氏が万葉歌碑の建立を思い立ったのは、大沢氏の没後二十年も後のことである。

①の高野辰之氏の歌碑の近くに信澤氏が建てた「筆塚」がある。筆塚の裏面には次のように刻まれている。

自然に親しみ　美しい故郷の心にふれることが碑に託した願いです
幸いにして　故大沢雅休先生のご遺墨をはじめ　諸先生方のご揮毫を賜わりました
慎んで　深甚の感謝を捧げ　筆塚の辞とします
昭和五十五年五月五日

大沢氏の書は信澤氏が依頼したものではないので、上野国とは無関係な歌も含まれているのであろう。そういった歌まで歌碑として石碑之路に設置したのは、高崎市出身の大沢氏の書を、石碑として末永く残したいという意図もあったものと推測する。

二、万葉歌碑以外の石碑

万葉歌碑が並ぶ道の途中から分岐して、根小屋城跡に至る道にも計八基の石碑がある。これらの石碑に刻まれているのは、群馬ゆかりの人々の歌や俳句、詩などである。作者の年代としては、新田義貞（歌碑）が最も古い。あとの作者はすべて近現代の人である。村上鬼城の句碑、山村暮鳥の詩碑、大手拓次の詩碑、新島襄の言葉を刻んだ碑などがある。そして、根小屋城の本丸跡には、手島右卿氏の揮毫による昭和天皇の御製歌碑がある。「もえいづる春の若草よろこびのいろをたたへて子らのつむみゆ」という、昭和二十五年の歌会始において「若草」というお題でよまれた御製である。この歌碑がここにあるからには、この御製も群馬県と何らかの関係があるのではないかと想像されるが、それについては何も分からなかった。

新島襄の言葉を刻んだ碑

根小屋城跡に至る道には万葉歌碑は一基もないので、万葉歌碑めぐりが目的であれば、こちらの道には足を運ばずとも大丈夫である。

三、石碑の路再生プロジェクト

平成二十四年九月七日付上毛新聞の記事によれば、石碑之路に設置すべく歌碑自体は完成し、設置予定地付近まで運ばれながら、信澤氏が亡くなったために、歩道脇に放置されたままになっていたものがあったそうである。これらの歌碑をきちんと設置・整備して信澤氏の遺志を生かそうと、森林整備のボランティアグループである高崎里山の会代表の白石隆夫氏と、高崎商科大学の国際・地域交流センターの山崎紫生（しお）センター長とが、平成二十一年四月に「石碑の路再生プロジェクト」を発足させた。それが実って、三年後の今年、五基の石碑が新たに設置され、九月には現地説明会が行われた。このプロジェクトの実行に当たっては、高崎商科大学の地域創造ゼミの学生さんたちが中心的役割を担い、石碑周辺の草刈りやごみを撤去したり、碑文の解読や揮毫者の特定作業を行ったとのことである。

高崎商科大学が設置した歌碑の解説板

信澤氏の遺志を継ぐ、大変に意義深いプロジェクトであろう。本稿の一覧表・地図の⑱～〓（丸囲みの22・作字）の五基がその成果である。なお、放置されたままの石碑は他にもあるという話も聞く。これらも日の目を見るようにと願うものである。

平成 24 年度
伝統文化継承事業

伝統芸能まつり in 東毛

会場：明和町ふるさと産業文化館
入場無料（要整理券または電話申込み）

12 月 22 日（土） 13:00 開場（13:30 開演）
【出演（順不同）】賀茂神社太々神楽保存会（桐生市）／太田市八木節連合会（太田市）／木崎音頭保存会（太田市）／館林神楽保存会（館林市）／成北八木節保存会（館林市）／大間々おはやし保存会連絡協議会（みどり市）／みどり市八木節連合会（みどり市）
【同日開催】◇**パネルディスカッション「伝統文化継承の将来について」** 11:00 ～ 12:30（10:30 開場）
コーディネーター◎板橋春夫氏（國學院大學兼任講師）
パネリスト◎川島栄一氏（上三林ささら保存会副会長）／大塚和雄氏（山口大杉囃子保存会副会長）／田中おさむ氏（みどり市八木節連合会事務局長）

農産物の販売
12 月 22 日（土）・23 日（日）
12:00 ～（無くなり次第、終了）

12 月 23 日（日） 12:00 開場（12:30 開演）
【出演（順不同）】板倉はやし連（板倉町）／山口大杉囃子保存会（板倉町）／明和八木節保存会（明和町）／中谷お囃子保存会（明和町）／千代田八木節保存会（千代田町）／吉田西里神楽保存会（大泉町）／里神楽獅子舞保存会（邑楽町）／七粋会（邑楽町）
【同日開催】◇**ゲストパフォーマンス　「神楽太鼓 × コンテンポラリーダンス」**
14:20 頃～　ダンサー◎山賀ざくろ　神楽太鼓演奏者◎石坂亥士

【申込・問い合わせ先】（公財）群馬県教育文化事業団 文化振興課　Tel027-224-3960　※ 整理券は会場でも取り扱っています。

第 36 回県民芸術祭参加
群馬県文化基本条例制定記念

ぐんま郷土芸能の祭典

会場：ベイシア文化ホール（群馬県民会館）小ホール

伝統歌舞伎公演　平成 25 年1月 12 日（土）
11:00 開演（10:30 開場）　全席自由 500 円
司会・解説／葛西聖司（アナウンサー・古典芸能解説者）
【出演・演目】
- ❖ 横室歌舞伎
  一ノ谷嫩軍記　三段目　熊谷陣屋の段
- ❖ 横室子ども歌舞伎
  弁天娘女男の白浪　稲瀬川勢揃いの場
- ❖ 葛西聖司のワークショップコーナー
- ❖ みなかみ子ども歌舞伎　菅原伝授手習鑑　四段目　寺小屋の段

郷土芸能公演　平成 25 年1月 13 日（日）
13:00 開演（12:30 開場）　全席自由 500 円
監修／井田安雄（元群馬県文化財保護審議会委員）
【出演】
- ❖ 二之宮の式三番叟（前橋市）
- ❖ 乃久里神社お川瀬下げ神事／野栗太々神楽（上野村）
- ❖ 御川降り／月田近戸神社の獅子舞（前橋市）

【ゲスト出演】
- ❖ 雄勝法印神楽（宮城県石巻市雄勝町）国重要無形民俗文化財

【チケット取扱い】ベイシア文化ホール　前橋市日吉町 1-10-1　TEL.027-232-111　【問合先】（公財）群馬県教育文化事業団　TEL.027-224-3960

平成 24 年度文化庁文化芸術振興費補助金
「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」

伝統文化継承連携事業

歌舞伎公演

会場：ながめ余興場
（みどり市大間々町大間々 1635）TEL.0277-72-1968

平成 25 年1月 20 日（日） 開場 12:00　開演 13:00 入場無料（要整理券）　先着 650 名

出演演目

- ❖ **レクチャー「全国の地芝居の現状について」**
  城井智子（きいともこ）（公社）全日本郷土芸能協会　専務理事
  全国地芝居連絡協議会　副議長
- ❖ **渋川歌舞伎**
  座長　池田　勝　「奥州安達ヶ原　三段目　袖萩祭文の湯」

【問合先】（公財）群馬県教育文化事業団　事業課　TEL.027-224-3960

第 36 回県民芸術祭参加・群馬県文化基本条例制定記念

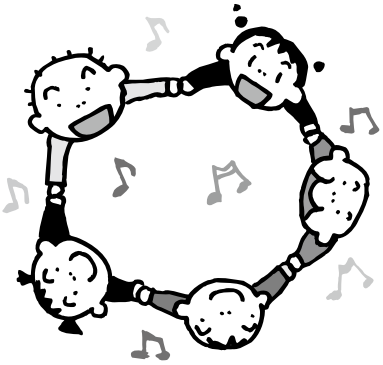
観世流能楽鑑賞会

観世流 能　楽

平成 25 年２月２日（土）会場：ベイシア文化ホール（群馬県民会館）大ホール
お話し・ワークショップ●開演 13:00（開場 12:30）
演　能●開演 14:00
入場料●全席指定　S席 4,500 円　A席 3,000 円（同学生 1,000 円）
（チケットの受取り・支払い）
　当館窓口の場合…予約日から２週間以内にお引き換え下さい。
　郵送希望の場合…郵便での配達時に現金でお支払い下さい。
　※なお、チケット代金の他に送料・代引引換料等はお客様負担になります。
【演目】
仕舞「笠之段」（かさのだん）「花筐」（はながたみ）「善知鳥」（うとう）
狂言「附子」（ぶす）
能　「熊野　村雨留」（ゆや　むらさめどめ）

【問合先】（公財）群馬県教育文化事業団　事業課　TEL.027-224-3960

地域文化をつなぐ



昭和村文化協会会長
林　信保

農村における文化協会の活動

昭和村は、日本一美しい村に指定された農業を中心とした村です。昭和村では、二つの協会、文化協会と体育協会で、スポーツと文化を守り育てています。体育協会では、十一月にバレーボール大会を行い、一〇〇チーム余りの参加で、一〇〇〇人を越える人達で一日を楽しんでいます。二月には、卓球大会を行い、五〇チーム余りの人達が参加をしています。文化協会では、十月に歴史探訪、十一月二十三日に文化祭、三月には、芸能祭の三つを柱に活動しています。歴史探訪には、今年は川崎大師、横浜の三渓園、羽田空港の三ヶ所の見学勉強会に、二〇〇名余りの人達が参加を得て行いました。特に力を入れている事は、各自弁当を持ちよって、昼食を広場又は、公園等で一緒に、おにぎりを食べながら多くの人と話をする、そんな所に重点を置き参加を増やす事に力を入れています。十一月の文化祭には、村民の人達の作品が多数出品され、公民館に展示されます。又読み聞かせ、子供の将棋教室、お茶会等も行われ、一五〇〇名程の人達が来観してくれます。三月の芸能祭は、七十組の人達が舞踊、コーラス、大正琴、ギター、マンドリンなど、他にもいろんな分野の方々が参加しています。

昨年は、津軽三味線の松本梅しょう先生を招いて、演奏をして頂きました。文化協会の本部役員も大幅に、若返り五十代の人達が中心に話し合いの中で、文化協会として今出来る事、文化とは何かという事を、何度も話し合い考え、仲間作りではないか、そんな所に行きつきました。その事を頭に、これからの地域に根ざした文化活動に、取り組んで行きたいと思います。

お詫びと訂正

上州文化131号11頁「民謡に魅せられて」の中に誤植がありました。

三段目「北海道の北海鱈釣り唄の一部」（次掲）八行目

相手（誤）→柏手（正）

と訂正させて頂くと共に、お詫び申しあげます。

上（かみ）で言うなら神威の岬よ
次に美国に丸山岬
下で言うならオタモイ様よ
登り一丁に下りも一丁
都合あわせて二丁の山よ
おりとおりとに参詣致し
参詣致したその折からは
おさごまいては柏手たたく
わたしの願いを叶うたならば
（囃子省略）

創造力の恵み、音楽の癒し

松田夕香

衣・食・住・工芸…私たち人間は、大昔から自らが作った「もの」に囲まれ、自らが作った「道具」を使い、また私たちが使うものを形づくってきました。

工業化される前の、「手の技」です。

私は、伝統的な工芸品と出会ったときに、アートと出会った時と同じような感銘や、インスピレーションを受けることがよくあります。

そこに込められた高い精神性、作者の色彩センス、見事な構造、素朴で大胆な表現などに、心をゆさぶられ、その深淵な世界をもっと理解したいという衝動が呼び起こされるからです。

色とりどりの民族衣装を普段着とし、自分たちの着る物や使う道具を自らの手で生み出し、自給自足の質素な暮らしをする小さな村の人々…そんな少数民族の暮らしに、私はずっと憧れと尊敬の念を抱いています。

その一方で、買わせるために大量生産をして、すぐに捨てるようにしむけるという、私たちの身の回りにあるシステムの、なんと虚しいことでしょう。

「持続可能な社会」というものを考え始めた現代の人々の中にも、手作りのものを貴び、自ら手を動かして作る喜びに気づく人々が増えているように思います。

高度な化学の技術で生み出された、多様な素材、精巧に機械化された生産技術。それら工業製品と比較したとき、「手の技」は、一見すると「素人ではとても及ばない」だとか「機械に比べたらとても効率が悪い」…そんなふうに思うかもしれません。

では、この時代に、ものづくりを体験することとは、どんな意味を持つのでしょうか?

一番大事なのは、私たち自身の中で起こるできごとです。

身体感覚から離れがちになる現代の生活。うっかりすると頭でばかり考えて、感じたつもりになってしまう私たちに、「自らの手で作り出すこと」は、根源的な学びを与えてくれるのではないでしょうか。

「思い通りにならない」材料と向き合うことも大切です。扱う素材の限界を知るごとに、そこに手を加える自分自身は、非常な自由が与えられていると気づきます。

それは、パソコンの中に作られたバーチャルな世界では起こりえないことが、無限に存在する世界。現実のこの世界と、触れ合い関わりあうことです。

さて、ここで今回のテーマである「創造」とは、「音楽」とは、私にとって何であるのかという事を少し綴ってみたいと思います。

私にとって創造とは…想手世(そてせ)である。

十年ほど前のことでした。その頃すでに、独自の表現に向けて創作しながらも、「アート」や「芸術」という言葉が、自分の作品にはしっくりこないと感じ、それなら自分に合った言葉を作ろうとたどりついたのが、「想手世」です。その意味は『想」像したものを、「手」を使って形にして、「世」に出す。』ということです。(このことばは、二〇〇五年から自分のアトリエ名として使っています。)

この姿勢はずっと一貫していますが、ときにはあえて別の角度から創作を試みることも、発想を自由にし、プラスに働くと考えています。

私にとって音楽とは…癒しである。

若いころに取りつかれた原因不明の淋しさと不安は、十代後半から二十代後半まで続きました。それらを癒してくれる、まさに特効薬が音楽で、音楽を聴かずに終わる日は無いほどでした。

なぜそれほどに、音楽が私を救う役割を果たしてくれたのか、今になって冷静に分析すると、一つの要因は、曲に合わせて「歌うこと」で、自分自身の身体を感じ、世界とのつながりを感じ、自分の存在を確認することができたからかもしれません。それはその後、かけがえのない出会いを得て、バンドでバイオリンを演奏することへと変わりましたが、音楽は、今も変わらず私を支え続けています。

また、音楽を聴いて創造意欲がわいたり、制作をしながら音楽を聴くことで力をもらう事は日常で、

そういう意味では私の創造の大きな要素のひとつでもあります。

そうしてごく自然に造形と音楽が、私の中で手を結ぶようになりました。

今年のグループ展「どじんじん」（高崎シティギャラリー）で、その結実を映像作品として初めて発表することができたことは、自らの創造世界の新たな次元への一歩と考えています。

次に、私が「なぜ作品を作っているのか」にふれてみたいと思います。

その意図としては、

自分の感覚したい感覚を具現化させて、他の人たちにも味わってもらいたいからです。

そしてその時に人々がどう感じるのか？　私と同じようなのか、全く違うのか、私の気付かなかった事に気づくのか…

そんなふうにして起こってくる様々な反応全てを、私の作品として味わう事を幸せに感じます。

私は、二〇一一年の東日本大震災の後、その衝撃の中で心底からこの状況と自分自身を見つめ直すことが必要だと思い、「このままでいてはいけない」と、十年以上暮らした東京から地元である群馬へ移ることを決めました。

「節電」「省エネルギー」もありました。原発事故の状況もまだまだ不透明で、どうなるか分からない中、家族と過ごす時間を作り、必要なら互いに手助けし、支えあう事が、より大切だと思ったからです。

そして、自分が進んできた道、作品づくりの原点となった幼少期を過ごした場所に身を置くことで、もっと純粋に制作に向き合って行けるのではないかと考えました。

震災、原発事故、経済と政治の混迷…　問題はせきを切ったように噴出し続けています。

しかしその多くは、いままで隠されていたものが見えるようになっただけなのです。

崩れゆく幻想。機能しないシステム。「どうやって生きのびるの？」人々には容赦ない現実が突きつけられます。しかし、そのような中でも多くの人道的組織が生まれ、民間の動きによって救われてゆく被災者たちも居るということを忘れてはならないと思います。彼らに共通するのは、すばらしい創造性を発揮しているという事です。インターネットを含め、人から人へのネットワークを巧みに生かし、一見なにも無いところからでも素晴らしく有効な活動は生まれてゆくのです。その事実のなかには、一筋の希望を見出せるような気がします。

「これほどの問題の渦の中で、それを収束し解決できる方法があるとすればただ一つ、一人ひとりが自分の力を最大限に発揮できること、自分のいちばん得意なことに取り組む中で、問題に立ち向かうしかない」という話を耳にしたことがあります。

もし、そうならひとりひとりが希望を失わずに、この激動の世界を生きていけるかもしれません。そして、願わくば、私も私自身の作品を発表し、発信し、創造性を発揮していくことで、この先の世界を創造することができたら…と思っています。

松田夕香
Matsuda Yuuka

▶ 1977 年　群馬県出身▶ 1996 年　大学入学とともに東京へ。芸術全般を学ぶ。染織コースを専攻▶ 1998 年　在学中より舞台衣装を多数手がける▶ 2002 年　「芸術運動会」を立ち上げ、野外でのアートイベント等を行う▶ 2005 年　「アトリエ sotese」として、作品制作・販売を開始する▶ 2007 年　バンド「ORANGEY」などで、音楽活動を始める▶ 2011 年　群馬県でグループ展「縁祭」「現代リアリズム展」（高崎シティーギャラリー）住居を群馬に移す。▶ 2012 年　グループ展「どじんじん」出展

twitter アカウント：@sotese
芸術や社会についてつぶやいています。

カフェの隅から

思い出を背に

竹田朋子

「栗の季節になりましたね」

この秋も、何人かの方から声をかけられた。

（あぁ、覚えていてくださるのだ……）

かつて上梓した随筆集に、母と二人で栗の皮をむく場面が登場する。それを心にとめ、毎年この時季になるとそのシーンを回想して言葉をかけてくださる。何てありがたいのだろう。

特にT・Hさんは、毎年ご自分の庭の栗を何度も届けてくださる。優しい笑顔と共に。

早速頂いた栗をゆで皮をむく。軽いシロップ煮にしてケーキに使うのだ。それを食した友人が、

「手製の栗でしょう？　価値があるわ！」

と言ってくれた。

市販のシロップ煮のように鮮やかな黄色ではないが、それが貴重なのかもしれない。

「思い出を背に、進め」

最近出合った言葉だ。かつて、ふるさとのキッチンでむいていた栗を、いま移転先のこの地でむいている。

七年前の秋、移転を半年後に控え、私はどんな気持ちでむいていたのだろう。無心だった、と思う。決めたこと、決まったことに抗わず、ただ無心に、ひたすら大きなボールにいっぱいの栗を母とむいたのだ。そして —— 今もそうだ。

五十年にも及ぶふるさとでの生活を思わない日はない。そして、そこで立ち止まりそうになる。

しかし、それらを背に、進め、と教えられた。張りつめていた心が、ゆるんだ気がした。思い出を、財産にできる気がした。

さてさて —— 栗である。

買ってきた栗ではなく、頂いた栗をむける幸せに気づかされたこの秋。

T・Hさんに感謝を抱きつつ、初冬に向かって進めそうである。

竹田　朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

レストラン　伊万利ダイン
前橋市文京町2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL
天坊
政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬
味わいの旅
——四つの食事処で料理が選べる

想いを“かたち”にする。

株式会社 藤田ビジネスプロモーター
前橋市問屋町 1-1-1　TEL 027-251-4455 (代)　FAX 027-253-0057
http://fujita-biz.co.jp/　E-mail fbp-npo.spirit@k5.dion.ne.jp

戸建からレジデンス ペットとくらす アパ|マン
大小店舗オフィス 倉庫工場 店舗|事務所
個人から法人 建物|土地
不動産有効利用 不動産活用

ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

住宅ローン「金利選択プラン」
選べる魅力で快適な住まいづくり

マイカーローン
自動車の購入・車検等に

教育ローン「仕送り名人」
入学金・授業料・仕送り費用に

住宅リフォームローン
ご自宅の増改築・補修・改修費用に

「ナイスサポートカード」カードローン
ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能

フリーローン「おまとめ太郎」
ご返済をまとめて一本化

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。
群馬銀行ダイレクトセンター
0120-139138 受付時間 9:00～20:00
土・日・祝休日、12/31～1/3は除きます。

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

編集後記

◇ 秋といえば『スポーツの秋』『芸術の秋』『読書の秋』などという言葉が話題になる季節。しかし、私は何といっても『食欲の秋』が一番親しみを感じます。秋の味覚の定番は、やはり新米で炊いた栗ごはんや、秋刀魚の塩焼きなどでしょうか。実りの秋とも言いますが、自分自身を実らせないように注意しながら楽しみたいものです。（ＮＨ）

◇ 本誌希望の方は、送料（140 円 × 希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事　大 澤 正 明

ⓒ 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化
●第 132 号 ●平成 24 年 11 月 25 日発行（年 4 回発行）●発行人 福 島 金 夫
●発行所 〒371-0801 前橋市文京町二丁目 20-22 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www. gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目 18-7